

学

就職活動 吃音などに悩む学生

人手不足とされる中でも、就職活動は学生にとって大きな関門だ。コミュニケーションが取りづらい、新しい環境が苦手といったつまずき要因を抱える学生は孤立しがちで、自分に合った企業にたどり着くのがより難しい。そうした学生に寄り添って支援している名古屋経済大キャリアセンターで取材すると、就活の仕組み自体の問題も見えてきた。

(日下部弘太)

「今までは吃音(くわいごん)を企業に伝えずにやってきたけど、伝える場合と伝えない場合を両方やるのはどうですか」

「そっちでやってみたいです」

昨年十二月下旬、愛知県犬山市の名経大キャリアセンター。職員の大野好美さんが、四年の男子学生と面談していた。学生は吃音があり、就活に苦戦。気持ちがあがなえた時期もあったが、定期的な面談を通じて「もう一回やってみよう」という感じになった」と笑顔を見せた。

大野さんはセンターのキャリアコンサルタントで唯一の常勤職員。多い時は一日七、八人の学生と面談し、就活のあらゆる困り事に対応している。「エントリーシートに書ける成功体験、ないです」と話す学生は多いが、よく聞くと見つか。この男子学生は演劇

孤立させない 支援模索



学生と面談する大野さん＝愛知県犬山市の名古屋経済大キャリアセンターで

に挑戦し、オンライン留学もしていた。

ただ、「意欲的に活動している学生でも就職先が決まらないことも」。疑問に感じるのは、新卒一括採用など日本独特の就活のあり方。職種よりも会社を重く

大学担当者 採用制度の課題指摘も

不安やつまずきを抱える学生が自分に合う就職先を見つける鍵の一つは、丁寧なマッチングにありそうだ。

「不慣れな環境への不安が強いタイプ」と話す名古屋市の女性(三)は学生時代、大学の就職支援部門には頼らず一人で就活を進めた。「自分を生かせる」とは思わずに入った最初の勤務先は上司の叱責がつらく、うつ病に。三年近く療養した。

再就職では市の事業「名古屋市若者・企業リンクサポート」を利用した。スタッフが本人の特性を把握した上で、合う企業と一緒に探し、見学にも同行する。

見る「就社」の考えが根強い上、「大きくは一般枠か障害者枠の二者択一。中間が見えない」。障害に当てはまらなければ、個別の事情は配慮してもらいにくいのが現状。吃音もそんな特性の一つだ。

九年前からセンターで働く大野さんには、近年、学生同士の関係性が希薄化している実感もある。就活でも支え合えず、悩みを一人で抱えがち。働き始めた当初、面談は一日一二人だったが、今では手帳が面談予定で埋まっている。

自分に合った職場で長く働けることが大事だとして本人の気持ちを大切に支援を進めているが、親が「壁」になってしまつことも。親

御さんの中には大手・安定へのこだわりが根強いケールではない、と知ってはしい」

こうした課題を受け、名経大では二〇二三年度、新たにハローワークの職員を招き、インターンシップ(就業体験)前の二年生、保護者らにそれぞれ講演してもらつことにした。特に、うまくいかなかった場合の対処法や相談先の情報提供に力を入れるつもりだ。

「頼れる場所、サポートする人がいることを伝え、学生が失望感を持つ前に何とかしたい」と大野さん。より良い方法を模索しながら、個々に合わせた支援を続けていく。

本人の特性と企業 丁寧なマッチング大切

病歴を明かして就活し、二〇二二年春に木製品製造販売の「アルコム」(愛知県東郷町)に入社。昨夏には正社員になった。

経営責任者の大蔵力也さん(五)は「何でも挑戦してくれる。いないと困りません」。女性も「前向きに仕事に取り組んでいる」と話した。

リンクサポートの代表、渡辺ゆりかさん(五)は本人の特性に合った企業選びの重要性を強調。「大学のキャリアセンターと支援機関が早めに連携し、一部役割分担することで、学生が挫折するケースを減らせるのでは」と話した。

トリーシートの書き方講座を催す。無料。BIZナビを活用し、採用担当者に伝わりやすい志望動機を書くコツを解説する。詳しくはQRコードから。



中日新聞の経済ニュースサイト「中日BIZナビ」編集部は27、28の両日、名古屋市千種区の吹上ホールで開かれる「ジモト就職応援フェア」(中日新聞社共催)で、エン